Yamanashi Brand　やまなしブランド ❹

「甲斐絹」の伝統を未来につなぐ

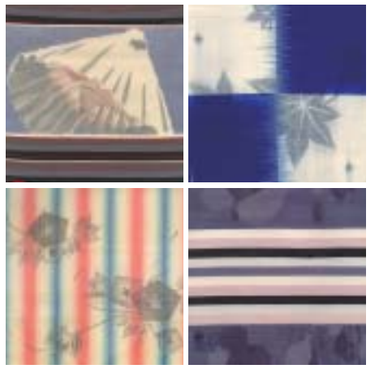
郡内の織物 Textile

富士北麓に伝わる徐福伝説では、
中国から不老不死の霊薬を求め渡来した徐福が、
郡内地方に初めて織物を伝えたという。
富士山を仰ぐ郡内地方は養蚕の適地として、
古くから手織りの絹織物が発達し
「郡内絹」として江戸の人々にもてはやされた。
やがて富士講の隆盛とともに、その名は全国に知れわたるようになった。
また明治になると、「甲斐絹（かいき）」と呼ばれ殖産興業の花形となった。
戦前に姿を消してしまったその技術と伝統美は、
今や新たな時代のテキスタイルとしてよみがえり、
世界から注目されている。

江戸時代から名をはせた「郡内の織物」の伝統

徐福伝説にまでさかのぼらなくとも、平安時代の『延喜式』に、織物の産地として甲斐の記載があることが知られている。郡内の山間地は養蚕の適地、富士の清らかな湧水も染色には欠かせない。「郡内絹」あるいは「郡内縞」として広く名が知られるのは、江戸時代になって郡内領主・秋元家三代（泰朝、富朝、喬知）による養蚕の奨励と先進地からの技術導入が進められてからと言われている。軽い薄手の手織りで、なおかつ腰が強く独特の風合いがある高級絹織物として評判となった。しゃれた郡内縞は、井原西鶴の浮世草子『好色一代男』や近松門左衛門の浄瑠璃『心中天の網島』にも登場するほどの人気のブランドであった。江戸時代も後半になると、上野原、猿橋、谷村、吉田に絹織物の専門の取引き市場ができた。その人気ぶりは、十返舎一九の『甲州道中記』にも紹介されている。郡内絹は、「郡内海気」とも呼ばれたが、元々は南蛮貿易によりもたらされた輸入品の絹織物「海気」がルーツ。明治維新の山梨に赴任した若き県令・藤村紫朗の殖産興業策により、「甲斐絹（かいき）」と一般的に呼ばれるようになったとも言われるなど、この頃から生産量も一段と増え全国に販路を広げた。明治初期には、山梨県は全国有数の養蚕県、代表的な生糸の生産地となった。

明治以降、洗練された先染め、無撚（むよ）り、高密度の手織りである甲斐絹は、さらに生産を増やしていった。次第に流通も近代化し、上野原、大月、都留、西桂、吉田などがそれぞれ特色を持った生産拠点として産地化していった。甲斐絹から出発した織物産業は、時代とともに発展し、銘仙、袴地など、和装着物の生地はもちろん、洋服の裏地、夜具、座蒲団、傘地など暮らしに欠かせない織物として、郡内地域を代表する地場産業となった。

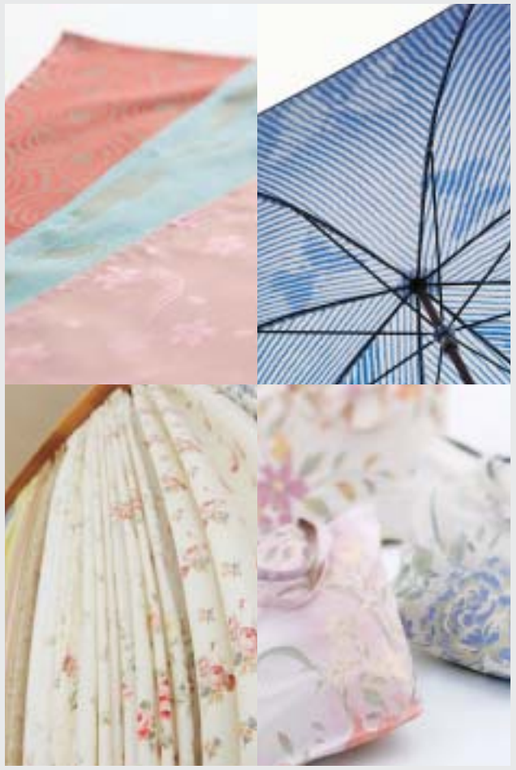


明治から昭和初期につくられた絵甲斐絹
絵甲斐絹は、柄に四季の風物などさまざまなものが図案化され描かれており、当時の暮らしや美意識が表現されています。

今によみがえる伝統美と確かな品質で新たな挑戦

織機上で経糸（たていと）に絵付けしながら織り上げる「絵甲斐絹」、仮織りした経糸にだけ絵柄を染め、仮織りの緯糸（よこいと）をほぐし（外し）ながら本織りをする「ほぐし甲斐絹」、また「絣甲斐絹」「高配甲斐絹」「無地甲斐絹」「玉虫甲斐絹」「縞甲斐絹」「しぼり甲斐絹」など、しゃれた模様とそれぞれの独特の風合いは、かつては和装に最適の逸品であった。伝統的な甲斐絹の美しさは、長いときを経た今、モダン和風のブームとともに、注目されつつある。

富士北麓地域は、それぞれの生産工程を専門に扱う工場、デザインから流通問屋までさまざまな事業所が集積した一大繊維産業エリアだ。高い技術と小回りのきく生産体制を生かして、高級裏地、婦人服地、ネクタイ地、スカーフ地などのほか、カーテン地、傘地などファッションやリビングニーズにも幅広く生地を提供、多様なアイテムを少数から生産できる産地となっている。また産地ブランド形成への取り組みも、吉田、西桂などの地域やグループごとに個性あふれる活動が行われている。そのひとつ、富士吉田織物協同組合が取り組んできた「ふじやま織」は、先染め、細番手、高密度など伝統的な「甲斐絹」の特性を生かして、その美しさを現代によみがえらせた新しい織物だ。



期待される新ブランド「ふじやま織」。富士吉田織物協同組合では各企業の積極的な展開を後押ししている。同組合商品開発部長の天野三吉さん。

組合としても積極的な商品開発が進んでいる「ふじやま織」は、「ジャパンテックス2007」「ジャパン・クリエーション2008」「東京インターナショナルギフト・ショー春2008」など、都内で開かれる大きな展示会でも活発なブランド展開を続けている。絹100%の純白の薄絹羽衣掛ふとん「十重（とえ）二十重（はたえ）」や伝統的な和柄を大胆に使ったエコバッグなど、すでに会場で大人気を博した商品もある。またカーテン地や傘地など、かつては生地だけを提供していた各企業も、製品化から販売まで自社で積極的に進めている動きも注目されている。本来の「甲斐絹」の美しさを知っているからこそ、多くの人に愛用してもらいたいと、オリジナルのデザイン開発にも熱が入る。これらの産地の取り組みを支えているのが、県富士工業技術センターの存在だ。明治38年、県工業試験場として設置されて以来、産地の特色である先染め工程での新技術の開発やデザインのソフト開発など織物業者と一体となった研究を続けている。

「甲斐絹」で培った技術と格調高いデザインを生かした郡内の織物。「やまなしブランド」の確立に不可欠な産業として、全国に、いや世界に進出する姿勢が楽しみだ。

「甲斐絹」の伝統技術は、新たなカーテン地の開発にも生かされている。この会社は首都圏に進出、ショールームを設けユーザーに直接販売することで、さまざまな情報を入手している。

「甲斐絹」の伝統を継ぐ「ほぐし織」は、機械化されてもやはり手間がかかる。大量生産とコスト競争の時代が終わり、今では吉田地域ならではの高級傘地として人気がある。商品化され直接市場に出回ることも普通になった。